



Title	柳永詞論 : その物語性と表現
Author(s)	藤原, 祐子
Citation	中国研究集刊. 2003, 34, p. 48-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

柳永詞論 — その物語性と表現 —

藤原祐子

はじめに

まず最初に、次の詞を読んでみよう。

【女冠子】斷雲殘雨。灑微涼、生軒戸。動清籟、蕭蕭庭樹。銀河濃淡，華星明滅，輕雲時度。莎階寂靜無覩。幽蛩切切秋吟苦。疏篁一徑，流螢幾點，飛來又去。對月臨風，空恁無眠耿耿，暗想舊日牽情處。綺羅叢裏，有人人、那回飲散，略曾偕鴛侶。因循忍便睽阻。相思不得長相聚。好天良夜，無端惹起，千愁萬緒（注し）。

ちぎれ雲に残んの雨。雨のおかげで軒先は微かに涼しくなった。清らかな風に庭の樹々はサヤサヤと葉擦れの音をたてる。（空を見上げると）天の河や美しい光を放つ星々が煌めいて、薄い雲が時々通りすぎていく。

（地面に目を落とすと、人の訪れが絶えて）苔生した階段はひっそりと寂しく、他には何も無い。微かな蟋蟀の鳴き声だけが切なく頻りに響いている。疎らな竹林を通る一筋の道では、数匹の螢が飛び回っている。

月の下、風に吹かれて佇みつつ、眠れず心は沈むばかり。思い出されるのは昔の恋のこと。華やかな人々の中にあんたが居て、あの時宴会の後、仮初めながら仲睦まじく恋人としてともに過ごした。軽々しくもどうして直ぐに別れてしまったのかしらね、恋っているのは本当に添い遂げられないものだったのだわ。あんたと一緒に過ごした楽しい日々が、わけもなく千々もの思いをまねきよせる。

一首全体は、秋のものの寂しい庭の様子から棄てられた女性の悲しみを導き描き出す、一見典型的とも言える閨

怨詞である。特に前段は、やや常套的表現を用いて秋の風景を叙述する。「無観」はよく分らない語だが、「何の動静もない・見るべきものが何もない」といった意味ではあるまいか。柳永の【雙聲子（晩天蕭索）】等にも同じ表現がある。

ところが、後段に入ると景色に在った描写の焦点が、一転その景色の中にいる女性に移り、第三者の視点で描かれていた内容も、主人公である女性自身の「語り」へと移行する。日本語の「あんた」に相当する「人人」の愛称で呼ばれる、もうすでに彼女の傍にはいない男性に對して、語りかけるかのように彼女は言葉をついでゆく。

最初は思い出である。二人の出会いと幸せだった日々を、彼女は感傷的に振り返る。「綺羅叢」は、通常着飾った妓女たちを指す言葉だが、ここでは、その「綺羅叢」の中に男性は居たのである。とすれば、二人の出逢いは宴席、女性は妓女ということになる。これは、従来の閨怨詞が夫あるいは天子を想う女性を描いたのに対し、明らかに異なった構図である。二人は、少なくともしばらくは仲睦まじく時を過ごした。「略會」は見慣れない語だが、この二字で「いいかげんに・仮初めに」の意と考えられる。薛本が校記で「略略」「略略會」に作るテキストもある、と言うが、「略會」はおそらく「略略」と同義で

あり、「會」は単に語助辞として添えられたものに過ぎないだろう。ただし、姜夔【水龍吟（夜深客子移舟處）】に用例がある他は、助語辞としてのこの二字の組み合わせは見出しがたい。

そんな「仮初めの」関係でありながら、彼女は今、軽々しく別れてしまったことを後悔する。「忍便」はこのままでは二字の繋がりが悪く、文全体の意味も通じにくい。音と字形から考えるに、「忍」は「怎」の誤字あるいは借用字ではあるまいか。同様の例と考えられるものに、無名氏【眉峯碧（蹙破眉峯碧）】に「相看未足時、忍便使鴛鴦隻」がある（注と）。

思い出を語り終え、彼女は現在に立ち返る。きっと男性はもう帰ってこない。それを知っているからこそ、「恋とは添いとげることができないもの」という慨嘆が生ずるのである。この「相思不得長相聚」はおそらく成語的な表現で、この詞の主題である「棄てられた女性」の物思いの行き着く「諦め」でもある。そして、「楽しかった日々も今となっては思い出すのも辛いだけ」という嘆息とともに、詞は締めくくられる。

この詞は、特に前段においてはいかにも閨怨詞らしい閨怨詞といえる。「雨」「風」「星」「蛩」「流螢」といった秋の景物を点描し、その中に「斷」「殘」「蕭蕭」「幽」

「苦」といった言葉をまじえることによって、女性の心情を直接的ではなく間接的に暗示していくのである。女性の孤独を秋の物寂しい景色によって象徴し、詞全体に一種の漠然とした拡がりを持たせている、と言ひ換えてもよい。しかし、この詞は伝統的な閨怨詞のように、単に暗示のみによつて女性の心を描こうとしているのではない。庭から小道へという広い場面から、その場面中の一構成要素であつた女性の姿へと描写の対象を絞つていき、最終的には女性の心の中へと侵入する。そして女性の抱く心情が、彼女自身の言葉を用いて描かれていくのである。その心情が極めて丁寧に描かれるばかりか、言葉の多くに口語が用いられることによつて、彼女の心情が実にリアルに読者に迫ってくるように思われる。

つまり、この詞は従来の閨怨詞の影を引きずりつつも、口語を多用し、焦点が絞られていく、という明らかに異なつた「新しさ」を有しているのである。

この詞の作者柳永は、その艶詞と羈旅行役詞によつて、宋代異色の文人として名高い。そして彼の詞中における口語の多用は、表現上最大の特徴の一つでありながら、従来は非難の対象となることが多かつた。だが、彼の詞の真価はその口語によるところが大きい。本論では、柳永の詞のうち特に恋愛に絡むもの（以下「恋愛詞」と総

称）を取り上げて精読し、そこに描かれた場面と口語表現の関わり、その効果について注目しつつ、彼が詠んだ詞の世界がどのようなものであつたかを考察していきたい。

(一)

まず、閨怨詞から見えていこう。閨怨といえは、男性の不在をなげく女性の心情を描いたものだが、この主題は『詩經』以来の古い歴史を持ち、また唐五代の詩詞も多くはこの主題をめぐる展開されてきた。それらと柳永の詞の違いは何であろうか。

【定風波】自春來、慘綠愁紅，芳心是事可。日上花梢，鶯穿柳帶，猶壓香衾臥。暖酥消，膩雲禪。終日厭厭倦梳裹。無那。恨薄情一去，錦書無箇。早知恁麼。悔當初、不把雕鞍鎖。向鷄窗、只與蠶牋象管，拘束教吟課。鎮相隨，莫拋躲。針綫閒拈伴伊坐。和我。免使年少，光陰虛過(注3)。

春になつてからというものの、花の紅が次第に衰え木々の緑が増していくことを愁えるばかり、春の景色の

一体何が私の心にびびったり合うっていうの。お日様が花咲く梢に昇っても、鶯が柳の下を潜り抜けても、私はまだお布団の中にくるまっている。真つ白で暖かい肌は瘦せ衰え、艶やかな髪は垂れさがったまま。一日中何もする気にならなくて、髪を梳かすこともお化粧することすら物憂い。ああ、やるせない、薄情者のあんたときたら、行ってしまったきり手紙の一つも寄越してくれないんだもの。初めからこうなるとわかっていたら、どうしてあの時、あんたの馬を繫いでおかなかつたんだらう。この書斎で、ただ紙と筆だけを与えて、閉じこめて勉強させていればよかつた。そうすればずっと傍にいられたし、ほっておかれることもなかつたのに。私はあんたの隣に座って静かに御針仕事をするの。(そうすれば)私も、楽しい青春の日々を一人きり虚しく過す羽目にはならなかつたのに。

この詞は、全体を通して女性の「語り」のみで構成される。閨怨詞の常套手法たる「神の視点」、すなわち第三者の立場から女性を観察して描こうという態度も一切見られず、従来の閨怨詞に不可欠の要素とも言える、風景や女性の部屋の調度に関する神の視点からの描写は一切無い。あくまでも、女性自身が自らの現状を恨みたつぷ

りに述べるのである。

「慘縁愁紅」は、李清照【如夢令】詞等に「綠肥紅瘦を愁う」という表現があるが、それと同義であろう。むしろ、李清照の表現は柳永のそれを言い換えたものではないか。花は自らの容色や精神の比喩でもあり、その衰えを嘆くのである。「是事」の「是」は「是處」「是人」の「是」と同様「甚」の意。今は春の盛り、外では梢に花が咲き、鶯たちが飛び回る。そうした「春の景色」が、恋人を旅立たせてしまった自分の心に適うはずがない、と女性はふてくされているのである。「芳心是事可」の一句は反語であろう(注4)。

この女性の愁いの原因は、旅立たせてしまった自分自身もさることながら、宦遊の旅に出たきり便り一つ寄せない「薄情」な男にある。そして「私がこんな状態になつているのはあんたを行かせてしまったから」とばかりに、後悔の言葉が吐き出されていく。「早知」と「不」は呼応関係にある慣用表現で、「しなかつたことを後悔する」の意。このセンテンスは「慙麼」で押韻されているが、「鎖」までが一繋がりである。「拘束」は吏牘語。宋詞中に用例はそれほど多くないが、「浮気な男」をしっかりと「つなぎ止めておく」というニュアンスで用いられる(注5)。

女性は一ひとしきり後悔を並べ立てた後、今度はあり得たであろう未来に思いを馳せ、「ずっと二人で仲睦まじく楽しく過ごすはずだったのに」と慨嘆する。「抛躲」は疊韻語で「棄てる・棄ておく」の意。「伊」はここでは二人称。「和我」の「和」は「連」と同じで、「私までも」。

この句は押韻されているが、前出「慙麼」の箇所と同様、最終句までが一センテンスとなっている。

この詞で表された感情は典型的な「閨怨」の情であり、女性はいわゆる「待つ女」に他ならない。にもかかわらず、前掲【女冠子】同様、従来の「閨怨」とは異なつた明らかな新しさを持つ。

たとえば、この詞を従来の閨怨詩と比較してみよう。

次の詩は「閨怨」と題される王昌齡の有名な絶句である（注6）。

閨中少婦不曾愁	閨中の少婦	曾て愁えず	
春日凝粧上翠樓	春日	粧いを凝らして翠樓に上る	
忽見陌頭楊柳色	忽ち見る	陌頭	楊柳の色
悔教夫婿覓封侯	悔ゆらくは夫婿をして封侯を覺め	しめしを	

王昌齡のこの詩も、あたりの風景が急に春めくことに

よつて女性の「春心」がかき立てられ、男性の不在を深く恨むという、柳永の詞と同様の趣向でできている。しかしながら、王昌齡の詩が、第三者の立場から女性を描くのに対し、柳詞は女性の言葉のみによつて描き、しかも王詩が出征した夫の留守を守る妻を描くのに対し、柳詞は「薄情一去」の一句に明らかなおり、恋人に去られた彼女の心情を描くのである。さらに、この彼女は目の前にはいない男に向かって、まるで語りかけるように愚痴をこぼす。

このような、手法としての代言体とそれを支える口語的な語り口が、この作品の新しさを作り上げているのである。

だが、愛する恋人と別れて悲しむのは女性ばかりではない。次の詞は、男性の立場から別れ別れの恋人の悲哀と恨みを述べた、いわば「男版閨怨詞」とも呼ぶべきものである。

【定風波】竚立長隄，淡蕩晚風起。驟雨歇、極目蕭疏，塞柳萬株，掩映箭波千里。走舟車向此，人人奔名競利。念蕩子、終日驅驅，爭覺鄉關轉迢遞。何意。繡閣輕拋，錦字難逢，等閒度歲。奈泛泛旅迹，厭厭病緒，

邇來諳盡，宦遊滋味。此情懷、縱寫香牋，憑誰與寄。
算孟光、爭得知我，繼日添憔悴^(注7)。

十里の長亭に佇むと、ゆつたりと夕暮れの風が吹く。

にわか雨は止み、見渡せば、長く続く柳並木が波のように揺れるのが、まばらな梢の間からちらちらと見え隠れする。人々は車や舟に乗って、虚名や利益を求め、奔走している。思えば、遊蕩児の私自身も、毎日朝から晩まで馬を走らせて駆けずり回り、故郷は遙か彼方、という有様だ。一体どうして、お前の居る部屋を軽々しく捨て去って、手紙も届かず、虚しく日々を送っているのか。どうしようもない、いつ終わるともしれない旅に心は沈んだまま、近頃では役人暮らしの辛酸も舐め尽くしてしまった。この想いを手紙に書いたって、お前に届ける術があるわけもない。如何にかの孟光のように賢明なお前でも、私がどんなにお前を想って、日々寝れていつているか知るまいなあ。

【定風波（自春來）】と比較すると、状況設定の共通性は明らかであろう。この二首はまるで対の作品であるかのような錯覚さえ覚えるのではないだろうか。こちらでは、旅にある男性が自らの現状を嘆き悲しみ、女性との

別れをひたすら後悔する。前段は、男性の眼前に広がる風景描写が中心となっているが、この詞で言いたい事は、結局のところ最後の「算孟光、争得知我、繼日添憔悴」という一センテンスに集約されている。

少し詳しく見ていこう。まず、長隄の夕暮れ、穏やかな春景が描き出される。「蕭疏」以下六句目までは、対句を構成しており、「蕭疏」「掩映」は双声の擬態語、「塞柳」「箭波」はともに名詞、「千」と「萬」は数詞というように、明らかな語彙の対応が見られる。「掩映」は、見え隠れする、というような意。男性はその景色を前に慨嘆する。遊蕩児として名を馳せた自分が、どうしてこんなところで他人と同じようにあくせくとしているのだろうか、と。「人人」は、ここでは「人們」の意。「轉」は「いっそう」。また「蕩子」の語から、相手の女性が妓女であることが推測される。相手が仮に妻であった場合、自らを指す言葉として「蕩子」を選択することは普通あるまい。そして、最終句で男性は女性に対して「孟光」と呼びかけるが、女性が妓女であることを考えると、この用語はいささか特別なニュアンスをおびるかもしれない。「孟光」はいうまでもなく良妻の代名詞であり、妓女への呼びかけとして用いるような名ではないからである。相手を「孟光」と呼ぶことは、この場合、二人の関係の

親密さを象徴的に示し、さらには「それほど大切で素晴らしいお前を捨て置いて」いる自分の立場や状況への後悔を際立たせることになる。

従来の閨怨詩において、男にとつての「名利」と女にとつての「愛」は、常に対立するものとして描かれてきた。「名利」を否定し「愛」を肯定するのは常に女性であった。しかし、この柳詞の男性は「宦遊」に対する倦怠感を示し、「閨怨」に登場する女性達と同様に別れを後悔している。このような男の立場からの「名利」の否定と「愛」の肯定は、柳永がしばしば詠うところであり、彼の詞における内容的な「新しさ」の一つである。

この詞は、従来の分類に従えば、間違いなく羈旅行役詞に属する。「羈旅行役」とは、『詩經』以来の古い伝統を有し（注③）、唐代に至っては辺塞詩と呼ばれるジャンルまで生みだされる、主に異郷の風物や郷愁が描かれる一類の作品のことである。ところが、柳永の羈旅行役詞は、閨怨詞と同様、従来のそれと明らかに異なった世界を持つ。その最大の特徴は、「郷愁」の核心が常に女性にあり、しかもその女性が多くの場合妓女である点である。彼の「羈旅行役」は、旅の風物や異客としての感情を詠うためにあるのではなく、むしろ「男の恋情」を描く手段である。つまり、旅は恋情をかきたてる一種の装置であり、

女性に対する未練や愛情を確認する契機なのだ。伝統的な中国文学の世界にあつては、男性の恋愛感情を文学に表出することは、半ば公然のタブーであつた。柳永はその「男の恋情」を「羈旅行役」という枠組みに仮託して詠んだ。柳詞における「羈旅行役」とは、彼自身の「実体験」に結びつくようなものでは勿論なく、「男の恋情」を描くための一種の「虚構」なのである。

そしてその虚構性は、あたかも対をなすが如き二つの【定風波】という、作品の構成方法からも端的に見取れる。先に紹介した【定風波】は、男を「宦遊」に出してしまつた妓女の後悔、次の【定風波】は「宦遊」に出してしまつた当の男の後悔。更に、この二つの【定風波】は、一人称による語り口まで共通しており、一組の男女をそれぞれの立場から別々に描いた、まるで合わせ鏡のような作品なのである。そこに、一組の男女を別々に描いて「対聯」にしようという、「聯章体」的な発想があることは、明らかと言えらるだろう。

(二)

柳永の作品は常に、まるで物語の一場面を描いたかのような味わいを持つものだが、次に挙げる作品も、その

典型の一つである。

【傾杯】離宴殷勤，蘭舟凝滯，看看送行南浦。情知道世上，難使皓月長圓，彩雲鎮聚。算人生、悲莫悲於輕別，最苦正歡娛，便分鴛侶。淚流瓊臉，梨花一枝春帶雨。

慘黛蛾、盈盈無緒。共黯然消魂，重攜素手，話別臨行，猶自再三、問道君須去。頻耳畔低語。知多少、他日深盟，平生丹素。從今盡把憑鱗羽。（注）。

心の籠もったお別れの宴、舟はまだ動き出さず、今しもお前とこの船着き場にやつて来たばかり。分っているのだ、この世の中というもの、白い月をいつまでも丸のままにしたり、美しい雲をずっと一カ所に留めておくことなど出来ないのだと。人生の悲しみで、軽々しく別れてしまうことほど悲しい事はない。中でも最も悲しいのは、睦み合う最中に恋人と別れてしまうことだ。お前の美しい顔に涙が流れる様は、まるで梨の花の一枝が春の雨に濡れそぼっているかのよう。

眉は涙でぐちゃぐちゃになってしまつて、涙を零してばかりでは、やるせない気持ちになるじゃないか。ともに悲しみにくれ、私がその手を何度も握りしめ、別れの言葉を告げて去ろうとしても、お前ときたらや

っぱり又引き留め聞いてくる。「あんた、行くのね」。私はお前の耳元に何回も囁く。「今まで愛の誓いと平生の真心をどれ程私が示してきたかわかりやしない。これからはみんな手紙に書いて送るよ」。

別れの宴の後の、船着き場での別れを描く詞であろう。叙述の視点は常に男性にあり、男性の「語り」によつて一首が展開される。

「凝滯」の「凝」は「疑」とも「擬」とも書き、疊韻の言葉。「情知道」の「情」は、「情取」の語があるように強調を表し、三字で単に「知る」の意。「於」は文言でもそうであるように「くよりも」。前段は、『楚辭』や江淹「別賦」を下敷きにし、また最後の二句は白居易「長恨歌」を踏まえる。ここまでの表現を一見すれば、男性は女性との別れを悲しみ、伝統的・月並みな表現を羅列する、むしろ平凡な詞との印象を与えかねない。この詞の非凡さは、実は後段にこそある。

前段最終句から後段の初めにかけて、見送りの女性がよくやく詞中に登場する。詞はここから佳境に入り、男性は泣き濡れる女性を慰めつつ、別れを告げる。通常であれば、未練を描きつつここで詞は結ばれるところである。事実、柳永の詞でも【雨霖鈴（寒蟬凄切）】等では、

そのような構造が取られていると言えるが、しかし、この詞の女性はそう簡単に男性を行かせてくれない。船に乗り込もうとするのを何度も引き留め、男性の意志を確認する。この部分、「問道」とあることから、次の「君須去」が女性が発した言葉であることが分かる。「猶自」は二字で「猶」の意。「猶自再三」で、しつこいくらい何度も、というニュアンスが窺えるのではないだろうか。次の「頻耳畔低語」は、一見「君須去」に続く女性の仕草のように見える。しかしここでいう「低語」の内容は、更に次の「知多少」以下最後までであり、これは文脈上、男性が女性に対して語りかける言葉と考えられる。別れを惜しみ不安がる彼女の問いかけに男性が返事をするのである。また、「低語」はひそひそ話することだから、どこことなく二人の関係を暗示するだろう。女性は、勿論離宴に同席していた妓女である。そして、男が耳元でささやくのが、「知多少、他日深盟、平生丹素。従今盡把憑鱗羽」、すなわち「今まで愛の誓いと平生の真心をどれ程私が示してきたかわかりやしない。これからはみんな手紙に書いて送るよ」というセリフなのである。「鱗羽」は、「雁書（すなわち羽）」「魚書（すなわち鱗）」の故事に基づく語で、伝統文学にあっても愛の手紙の代名詞として用いられるが、この詞を見る限り、「鱗羽」はどうも廓

の隠語のようなものを感じさせる^(注10)。

男は何度も船に乗りとうとする。が、その都度女に引き留められ、泣かれてしまう。それでやむなく、男は女の耳元で「手紙を書くから」と囁く。おそらく、この場面において男性は、なかなか船に乘せてくれない女性に、多少食傷気味なのだ。なんともユーモラスで生き活きたした、まるで物語の一場面を思わせる別れのシーンではないか。

宋以前の伝統文学全体を見渡した時、「男女」の別れのシーンそのものを描いた作品は、実はほとんどない。敦煌曲子詞や唐五代詞に至って、男女の別れはようやく主要な主題の一つとなっていくが、多くの場合別後の悲しみを愁う点に中心が置かれており、別れのシーンそのものは、詠われることはほとんどないのである。それに対して本詞は、別れのシーンそのものを主題としているばかりか、更に面白いことに、男女の別れを全体的な情感からではなく、二人の間で交わされる会話から描き、それぞれに感情をよりクリアなものにしたのである。そして、その手法が、シーンそれ自体をまるで物語の一場面のような生き生きとしたものになっているのである。

たとえばこれを、『董西廂』に見られる次のようなシーンと比較してみよう。

【越調】【上平西纏令】景蕭蕭、風淅淅。雨霏霏。對此景
爭忍分離。僕人催促、雨停風息日平西。斷腸何處唱陽
關、執手臨歧。 蟬聲切、蛩聲細。角聲韻、鴈聲悲。
望去程依約天涯。且休上馬、若無多淚與君垂。此際情
緒你爭知。更說甚湘妃。

【鬪鶻鶻】囑付情郎、若到帝里。帝里酒釀花穠、萬般景
媚。休取次共別人、便學連理。少飲酒、省遊戲。記取
奴言語、必登高第。 專聽着伊家、好消好息。專等
着伊家、寶冠霞帔。妾守空閨。把門兒緊閉。不拈絲管、
罷了梳洗。你咱是必。把音書頻寄。

【雪裏梅】莫煩惱莫煩惱、放心地放心地。是必。是必。
休恁、做病做氣。 俺也不似別的。你情性俺都識。
臨去也、臨去也、且休去、聽俺勸伊。

【錯煞】我郎休怪強牽衣。問你西行幾日歸。著路裏小心
呵、且須在意。省可裏晚眠早起。冷茶飯莫喫。好將息。
我專倚着門兒專望你。

【越調】【上平西纏令】日の光はさびしげに、風はサワ
サワ、雨はバラバラ。かかる景色に向かいつつ、どう
して別れるに忍びよう。しもべ旅立ちを促せば、雨は

やみ風はしずまり日は西に傾く。はらわた断たんとす
る時、どこに唱うか陽関の歌、手を取り合つて分かれ
道に臨む。 蟬の声頻りに、蟲の声かそけく、角笛
の音響き、雁の声悲しい中、旅立つ先を眺めれば遙か
天の果て、まずは馬に乗りたもうな、君がため流す涙
はいくらあろうと足りはせぬ。この時の気持ちがあな
たにどうして分かるうか。湘妃の涙など言うに足りぬ
もの。

【鬪鶻鶻】いとしい男に言い含めるには、「帝都に至れ
ば、かの帝都にはよき酒と美しき女、くさぐさの美景
はあれど、軽々しく他の女と、連理の例にならいたも
うな。酒は控え目に、遊びもなさいますな。私の言葉
を忘れねば、必ずや合格いたしましたよ。 ひたす
らにあなた、よきおとずれを待っています。 ひたす
らにあなたが、夫人県君の衣冠もたらすのを待ってい
ます。私は孤閨を守り、戸をしつかと閉め、楽器にも
手をふれず、化粧もやめておりましたよ。くれぐれも、
便りをたえずお寄せあれ。

【雪裏梅】悩みたもうな、悩みたもうな。安心して、
安心して。くれぐれもくれぐれも、かように悩んで病
となりたもうな。 私は他の人とは訳が違う。あな

たの気性を私はよく分かつております。行くにあたり、行くにあたり、まずは行くをやめてわが忠言を聴きたまえ。

【錯斂】わが君よ、無理に衣を引いて止めるをとがめたもうことなかれ。西に赴かれたらいつお帰りか。道中お気を付けあれ、ともあれ注意が肝要。遅寝早起きおやめあれ。冷たいものは食したもうな。ごきげんよろしう、私はじつと門にもたれてひたすらにあなたのお帰り待ちましよう」。

張生と鶯鶯の別れの場面である。鶯鶯は旅立とうとする張生をしつこく引き留め、「どうか浮気はしないように、無事にお帰りになるように」と繰り返して懇願する。柳永が【傾杯】に描いた世界が、この『董西廂』という物語世界と実によく似たものであることは、一見して明らかであろう。勿論、柳詞は物語詞ではないから、男女の関係やその間に交わされる会話を、丁寧かつ詳細に書き記そうとはしない。だが、男女の別れを別後の悲しみからではなく別れの情景そのものによって描き、更に会話を交えることによってその情景をより生き生きとしたものにした柳永の手法は、明らかに後代の語り物文学や演劇

のそれを予見させるものである。彼の作品に見られる虚構性は、別れを描く新しい視点や、会話という新しい表現方法とともに、後の諸宮調や散曲・雜劇といった曲文学の出現を準備していたといえよう。

(三)

では、こうして別れていった恋人達は、その後どのような結末を迎えるのだろうか。戯曲や小説では、張生と鶯鶯がそうであったように、団円するのが一般的と思われるが、柳詞においては必ずしもそうではない。たとえれば次の詞は、旅に出ている間に恋人の心変わりを被った男性を主人公に、破局の結末を詠んだものである。

【擊梧桐】香靨深深，姿姿媚媚，雅格奇容天與。自識伊來，便好看承，會得妖嬈心素。臨岐再約同歡，定是都把、平生相許。又恐恩情，易破難成，未免千般思慮。近日書來，寒暄而已，苦沒切切言語。便認得、聽人教當，擬把前言輕負。見說蘭臺宋玉，多才多藝善詞賦。試與問、朝朝暮暮。行雲何處去(注し)。

お前のその深々とした靨、艶やかな姿、優れた物腰

と美貌は天与のもの。お前と知り合ってからというものの、何かと尽くし続け、お前の心根は分かっている。

旅立つ時には再会を約束したし、必ずずっと一緒だと誓い合ったものだ。でも一方では愛情なんて所詮脆いものと知っていたから、それを思うと不安でいてもたってもいられなかった。

最近、手紙が届けば内容は時候の挨拶だけ、(私を恋しがって)嘆いているような言葉は一言もない。それで解ってしまったし、人づてに教えられましたが、やっぱり私と交わした約束は、簡単に反古にされてしまったんだね。聞く所によると、お前の新しい恋人の宋玉さんは才能豊かで詩才もあるらしい。じゃあちよつと聞くけど、朝は朝、夕べは夕べと流れていく雲は、一体何処に行くものなんだろうね(そんな雲みたいに浮気な奴、いつかお前を棄てて他の女の所に行くに決まってるぞ)。

この作品は、女性に対する男性の未練をひたすら描く詞である。「柳耆卿詩酒玩江樓記」(注①)の中では、柳永自身の体験から生まれた作品として登場するこの詞が、実際にどのような創作経過を持つかは知るよしもなく、またそれを探ることが本論の目的でもないのです、これ以上の言及は差し控えるが、ただ本作が「棄てられた女」な

らぬ「棄てられた男」の感情を描く新しさは、特記に値するだろう。なぜならば、中国文学においては、恋人を裏切るのはほぼ例外なく男で、未練を残すのは常に女として描かれるからである(注②)。だが、この詞において柳永は、その伝統的な構図を見事にひっくり返してみせたのである。

本作は、それぞれの句の関係と全体の流れを捉えにくいのが、【擊梧桐】の格律から見て、六句ずつで意味の纏まりをなすように思われるため、それを念頭に置きつつ内容を見ていく。

まず最初の六句、四句目に「自識伊來」とあることから、彼女と現在に至る経緯の説明から始まっていると考えられる。「お前の美貌と優れた風格、出逢ってからというもの、あれこれ尽くしてきたものだ」。この男性の回想は、現在の苦渋へと繋がっていく。「看承」は、特別にもてなすこと。「伊」と呼びかけられている女性は、間違はなく妓女であろう。

ところが、彼女との幸福な時間もつかの間、二人に別れが訪れる。「旅から戻ったら、その後は一生仲良く暮らそう」と、後の再会を誓いながらも、男性は不安を消せぬ。なんといつても、相手は妓女である。柳永の詞には妓女が多く登場し、時には一途に客を思い続けるいじら

しい女性もいるが(注五)、しかし現実には、妓女とはしたたかなものであろう。この詞ではその認識を踏まえて、「愛とは成しがたく壊れやすいもの」と男性に慨嘆させるのである。八句目の「把」は介詞で、その目的語は九句目の「平生」であり、ここでは句格を超えてセンテンスが繋がっている。同様に、後段「擬把前言輕負」の「把」も介詞である。伝統的な韻文では省略される、「介詞」が敢えて用いられることで、男性があなたか女性に話しかけるかのように発した言葉、というニュアンスが添えられているのである。

後段、男性の不安は現実となってしまう。自分の不在を特に悲しむ様子もない彼女からの手紙。加えて人々から聞こえてくる噂。それらは全て女性の「前言輕負」を男性に知らせていた。この時点で、彼はおそらく旅から彼女のいる街へ戻ってきているのだろう。「苦」は強調の副詞、「教當」は二字で一語であり、「當」は語助。「便認得」は「それでもうわかった」というニュアンスであり、男性の苦々しい気持ちも伝えている。

そして最後の五句で、男性は嫌みと未練たっぷり、「新しい男は才能溢れるいい男かもしれないが、そんな男なんて信用出来るものか」と負け惜しみを口にする。男性の嫉妬心ともいうべき感情は、従来の恋愛詞の中に

は見いだしがたく、斬新で面白い。また、相手の男性を「蘭臺の宋玉」と美称し、「多藝多才」というところに、彼なりの精一杯の皮肉が込められているよう。「與」は「ために」と解するしかないが、そのニュアンスはよく分からない。「問」を強調する役割を果たしているのかもしれない。「試與問」という形の問いかけは他の詞人にも例があり、いずれも「ちよつと聞いてみよう」という意味で用いられているようである(注五)。また、最後の三句は二句目の「暮暮」で押韻しており、句格的には一旦途切れるのだが、意味上は一纏まりであつて、「問」の内容となっている。

妓女の手練手管に振り回された男性の心理が、随所に織り込まれた口語表現によつて、まるで実際に女性に向かって語りかけているかのようにリアルに描かれ、一首全体が一種の「ぼやき」となっている点に、この作品の面白さはある。男性の単なる恋愛感情の表出すらタブーであった中国文学の中で、男性のこのような未練を、柳永以外のどんな詞人が詠んだだろうか。

ところが、柳永には次のような作品もある。

【駐馬聽】鳳枕鸞帷。二三載，如魚似水相知。良天好景，

深憐多愛、無非盡意依隨。奈何伊。忝性靈、忝煞些兒。
無事孜煎、萬回千度、怎忍分離。而今漸行漸遠、
漸覺雖悔難追。漫恁寄消息、終久奚爲。也擬重論繾綣、
爭奈翻覆思維。縱再會、只恐恩情、難似當時(注16)。

鸞鳳の枕に鸞鳳のとばり。二三年の間、水と魚のよ
うに離れられない仲として過ごした。青春の毎日、深
く愛し合つて、真心を尽くし、お前の氣に入るように
やつてきた。いかんせん、お前は我儘でちよつとばか
り氣が強い。(とはいえ)喧嘩することもなく、千回万
回逢瀬を重ね、どうして別れに耐えられよう。今
となつては私は既に旅の途上、お前から次第に遠ざか
り、後悔しても手遅れと感じるばかり。むやみやたら
とこうやつて手紙を書いてみたところで、結局どうに
もなるまい。もう一度お前と仲良くやりたいと思ひは
するが、いかんせん、あれこれ考えこんでしまう。(將
來)また逢えたとしても、二人の愛情は前のままでは
あるまいよ。

この詞は、前段だけを見れば女性の氣持ちを詠つてい
るようにも見えるが、後段で旅に言及することから、明
らかに男性の思ひを詠つた作品である。内容は旅先から

女性に宛てた手紙であり、その意味で【定風波(崢立長
亭)】と共通した世界と言える。ただし、【定風波】が「残
してきた女性を恋しく思い、旅に出たことを後悔する」
ものであったのに対し、ここにはまた別の設定がある。

まず、前段は回想に始まる。これは柳永の常套的手法
であり、回想から現状へという一連の流れで、恋人達の
履歴を提示するのである。ここでは、女性との生活が「如
魚似水相知」という語で象徴され、以下「お前の氣に入
るようにして、我が儘にも嫌な顔一つせず、喧嘩もせず
に」いた、自分の女性に対する愛情の深さを、くどいほ
ど繰り返し述べる。四・五句は類義の熟語を重ねた対句
であり、「Jiangtian」「shenjian」の部分では音声的偕
和も見られる。「忝煞」は、おそらく「忝」が二音節化し
た疊韻語で、「甚だしく」の意。「些兒」は「些」が兒語
化したものであつて、口語的な言い方。「孜煎」は「憂慮・
煩惱」の意だが、ここでは喧嘩や諍いの意で用いられて
いるのだろう。

「忝性靈」と表現される女性の性格は、他人から見れ
ばマイナス要素である。しかし、彼女に「依隨」してい
た男性の、一種盲目的な恋愛心理の前では問題にならな
かった。それが、旅に出たことをきっかけに、或いはそ
れ以前に旅に出る契機となる何らかの出来事があつて、

男性の心に変化が起こる。前段で見られるくどいまでの「愛していた」ことへの言及は、女性を立てると同時に、自分の誠実さをアピールするための、一種のパフォーマンスにすぎない。なぜなら、男性は「別れるに忍びない」といつつも、結局はこの詞でもって女性に「さようなら」をいっていると考えられるからである。

後段、男性は直接的な言葉ではなく「旅に出たからには、お互いの距離は離れていくばかりだし」「手紙を書いても、もう会えないんだからどうしようもない」などと、「旅」にかこつけて別れをほのめかす。「奚爲」は、何を言うかよく分からないが、ここでは「沒辦法」の意味と考えた。そしてついには、「もう一度お前と仲良くやりたいと思いはするが、いかんせん、あれこれ考えこんでしまう」と、煮え切らない奥歯に物の挟まったような言い方をする。前述のように、中国の恋愛文学において心変わりをするのは、通常男性の方である。それをここでは、「只恐恩情難似當時」と、女性の心変わりを男が心配し、自身の心変わりを糊塗するかのように別れをほのめかしている点に、やはり柳永詞の面白さがあるように思われる。

この作品は、彼の他の羈旅行役詞、すなわち女性への恋情を詠う手段としてのそれとは、「別れ」を言う点で明

らかに異なった内容を持ち、裏に何か特定の設定が隠されていそうに思われる。少なくとも、この詞に登場する男性がなぜこのようにまわりくどい方法で別れを告げなければならぬかについて、我々には十分な情報を与えられていないような印象を受ける。そうした状況の中で、男女は勝手に別れのストーリーを進めていくのである。

このような印象は、勿論この詞において顕著なのであるが、柳詞全体を貫く「難しさ」でもあるだろう。柳詞はしばしば、恋愛劇の一幕だけが突然切り取られて上演されるような印象を我々読者に与える。言い換えれば、柳詞の背後には常に、虚構をも含めたある大きな「物語」世界が隠されているのではあるまいか。

おわりに

ここまで、すべて六篇の柳詞を読んできた。程度の差こそあれ、いずれも従前の詞とは異なる世界が表現されていること、男女の様々な恋愛模様と心の機微が現実的かつ丁寧に描かれていることが、明らかに変わったのではないだろうか。

最後に、柳永の真骨頂とも言うべき詞をもう一首読んで、本論の締めくくりとしたい。他の作品と同様に、語

棄や句の繋がり分かりにくい閨怨詞であるが、おそらく不誠実な恋人への恨みを述べる、女の心情を詠うものである。

【錦堂春】墜髻慵梳，愁蛾嫩畫，心緒是事闌珊。覺新來憔悴，金縷衣寬。認得這疏狂意下，向人誚譬如閒。把芳容整頓，恁地輕孤，爭忍心安。依前過了舊約，甚當初賺我，偷翦雲鬢。幾時得歸來，香閣深闌。待伊要、尤雲殢雨，纏繡衾、不與同歡。儘更深、款款問伊，今後敢更無端^{注1}。

乱れた髪を梳かすのも、愁いに顰めたままの眉を描き直すのも面倒で、心はそぞろ。近頃めつきり瘦せて、金縷の衣もぶかぶかになってしまった。あんたの浮気者の心根はもう分かっていたわよ、私をこんなに蔑ろにするんですものね。綺麗にお化粧したって、この嘘つき！どうして落ち着いてなんて居られるんですか。

いつものように約束を破るのね。最初に私を騙してこつそりと愛を誓わせといて、何よ。一体いつになつたらあんたは帰ってきてくれて、部屋を堅く締め切(り)、二人きりにな(れる)の。(でも二人きりになつて)あんたが「愛し合いたい」って言ってきたら(そう簡単に

は許さない)、私はお布団にくるまって、楽しんでなんかやらないわ。夜が一番更けた頃に、ゆつくりと浮気を問いつめてやるの。「これからはもう二度と勝手気儘に悪さ(浮気)なんてさせないわよ!」って。

まず前段、この女性は怒りに燃えている。何故なら恋人が浮気性で、彼女のことを顧みないからだ。この女性は棄てられたわけではなく、男性も旅に出ているわけではない。彼女はただ、いつも待たされ続けているのである。この男女は、所謂羈旅行役・閨怨詞に見られるような「離れ離れ」とは異なつた状況にあつて、女性の側も単なる「待つ女」ではなく、今度帰ってきたらどうしてやろうかと、怒りをつのらせている女性なのである。

この詞は【定風波(自春來)】同様、いかにも柳永の詞らしく、最初から最後まで女性の「語り」で埋め尽くされている。「毎日が憂鬱で、着物がぶかぶかになるほど寝れてしまったわ」。女性の憔悴は、男性への愛情の深さに比例する。「闌珊」は疊韻語で、「衰え落ちぶれる」の意。「疏狂」の語は白居易詩にすでに見え、若者の恋への強い情熱が「気違いじみた」状態であることをいう。ここでは男性に対する罵倒語として用いられており、ふらふらと遊び回る浮気者、という程の意味であろう。「意下」

は「意」が二音節化した語で、「心」。「向人諧譬如閒」という表現は見慣れないが、『欽定詞譜』では「向人諧、譬如閒」と句格を切っている。それに従って考えていくと、「人」とはおそらく女性自身のことであり、「諧」は「すっきり・全く」の意味であるので、ここまでで「私に対しては完全に」となる。そして「完全に」どうなのか、ということが以下の三字であろう。「譬如閒」は「匹如閒」とも書き、張相『詩詞曲語辭匯釋』は「亦爲平常不打擊義或沒關係（放っておく・いい加減に扱う）」と帰納する。そして「認得」の語がここまでを領し、全体としては「あんたは浮気者で私をいい加減に扱ってばかりなのは分かった」と言うのである。しかし、それが分かったからといって、冷静でいられるはずもない。「綺麗なお化粧もあんたがいらないんじゃないし、こんなに簡単に浮気されるんじゃない」。『輕孤』はこのままではよく分からないが、「孤」は「辜」としばしば通用され、ここでも「輕辜」の意^(注18)。

恨み言と嘆きが中心になっているとは言え、全体の表現そのものからは、陰鬱な湿つぽさは殆ど感じられない。この女性にかかると、深刻なはずの「待つ」状態も、どこかコミカルでさえある。帰りを待ちわびてジリジリする想いと、怒りとのせめぎ合いが、実にリアルに、しか

も愛情豊かに描かれている、と言える。

後段に入ると、「賺我」という激しい言葉が口をついて出る。更に、彼女は愛の誓いの印である「翦雲鬢」という行為にも、「偷（こっそりと）」の字を冠する。そこには男性の巧言に乗せられてしまった、という意識の強さが表れている。そして女性は、男性への返礼の具体案へと、次第に傾いていく。

「あんたが来たら」と、彼女は空想を始める。ここからは一種劇中劇的な趣がある。過去の回想を詞中に詠み込むという手法は常套的だが、このように未来の空想を取り入れるのは、斬新な試みと言えるだろう。内容も非常に具体的で面白い。彼女は、「尤雲滯雨」を求めて寄ってくる男性をはねつけ、一人布団にくるまり、「不與同歡（楽しんでなんかあげない）」と決心する。「無端」は、通常「故もなく」の意味で用いられるが、蔣禮鴻『敦煌變文辭義通釋』は「不正・胡亂」と帰納しており、元曲や平話の類にも同義の用例が多く見える。柳永もおそらくはその意味で用いている。おそらく、当時の極めて口語的な言い回しなのであろう。この「無端」が「敢更」という強い語気とともに使われ、男性への罵声として用いられる。「今後、でたらめでもしようもんなら」。女性の怒りはこの言葉で頂点に達する。だが、これはあくま

でも女性の空想（シュミレーション）であつて、現実はそのではない。もし男性が帰つて来たなら、全く違つた嬌態を女性は示すのかもしれない。その辺の男女の機微を、柳永は女の怒りのみを描いて、実に見事に暗示していると言えよう。

だが、かつてこれほどまでに自らの感情、特に「待たされていること」への怒りを生き生きと示した女性が、中国文学の中に存在したのだろうか。従来「閨怨」の主題で繰り返して詠まれてきた、ひたすら待ち続ける女性というのは、男側の一種の理想・幻想であろう。そして、柳永がここに描いた女性も、怒ることによつて嬌態を示す「かわいい女」かもしれない。しかし柳永が、「待つ女」という虚構の中に「怒り」という新たな個性を付け加え、その個性を口語という女性の肉声を用いて、よりリアルに描いたことも、また事実なのである。

柳永は、それぞれの詞の中にそれぞれの「設定」「虚構性」を持ち込んだ。彼は、男女恋愛の形を幾つものパターンに分け、閨怨・羈旅行役という従来あつた枠組を用いつつ、様々な「新しさ」を取りこみ、独自の恋愛詞のスタイルを作り上げたのである。一首の中に過去・現在・未来という複数の時間を詠み込み、そこにそれぞれの男

女の「物語」を暗示した。また、詞全体を「語り」で埋め尽くしたり、「会話」を交えることによつて、各シーンにおける男女の心の機微を、見事に描きだした。そしてそれらの手法は、後代の戯曲文学を先取りするものでもあつた。

従来、柳詞に見られる強い口語性は、批判の対象とされるが多かつた。良しとされる場合でも、その「通俗性」のみに評価が偏つていたように思われる。しかし、柳詞にとつてその口語性は、詞の世界を支える不可欠な文体であり、代言体と結びついた最も本質的な要素であつた。彼は、規範・素材となりうる膨大な過去の作品の中から、描こうとするストーリーを構築するに必要な要素を抽出し、一種の恋愛モデルともいうべき新しい物語「世界」を創り上げた。それを踏襲し発展させた「世界」が、後代の戯曲文学に見出せることは、既に指摘したとおりだが、その意味で柳永は、後の書会才人の「はしり」と言えるのである。

注

(1) 柳永の詞の引用に関して、薛瑞生『乐章集校注』（中國古典文學基本叢書 中華書局 一九九四年）朱祖謀『彊邨叢

書』本を底本とする。以下薛本)は、各本の異同を校訂し、字句の確定に一定の判断があると思われるので、ここでは一応薛本を定本とした。但し、毛晉『宋六十名家詞』(上海古籍出版社 一九八九年。以下毛本)、吳訥『百家詞』(天津市古籍書店 一九九二年。以下吳本)、唐圭璋『全宋詞』(中華書局 一九六五年。以下唐本)も参照し、内容に関わるような重要な異同がある場合は、注の中で指摘する。ただし、三種全てが同様の字につくる場合は、煩瑣を避けて「諸本」という。また、注中に引く宋詞の詞牌名の後の数字は、『全宋詞』における所載頁数である。

なお、この【女冠子】の字句については、初句「斷雲」を毛本・吳本ともに「斷煙(烟)」につくる。

(2) 無名氏【眉峯碧(蹙破眉峯碧)】(364)「相看未足時、忍使鴛鴦隻」は、「まだ仲良くなって間もない時に、どうしてすぐに鴛鴦をひとりぼっちにさせてしまった(別れてしまった)のだろう」の意。

(3) 「錦書」を、諸本は「音書」につくる。また、「吟課」「年少」を、毛本・吳本はそれぞれ「吟咏」「少年」につくる。

(4) 陶然『楊柳岸曉風殘月』(唐宋詩詞名家精品類編 柳永卷 河南文藝出版社 二〇〇二年)も、同様の解釈を示す。

(5) 例えば、歐陽脩【摸魚兒】(147)「況伊家年少、多情未已難拘束」、高觀國【思佳客】(2859)「春思倦畫窗深、誰能拘

束少年心」等がある。

(6) 本文は『四部叢刊』本『才調集』卷八に依る。

(7) 第一句の「長隄」は、諸本「長堤」につくる。しかし、第一句は不協韻句であり、本詞は微韻仄声で押韻する。「隄(堤)」は微韻平声で、一応韻字ではないものの、不協韻句に脚韻と同音が置かれるのは不自然である。「欽定詞譜」は「長亭」に作るもので、今仮にこれに従って訳した。この詞は毛本との異同が特に著しく、毛本は「垂柳」を「柳」、「驅」を「驅馳」、「邇來」を「近來」、「縱寫」を「總寫」につくり、後段第一句の「何意」を前段の末尾に付す。

(8) 『詩經』「豳風」「東山」や、『文選』卷二十九「古詩十九首之十四」などが羈旅行役の主題が詠まれる最初期のものである。

(9) 詞牌名を、毛本・吳本は【傾杯樂】につくり、『欽定詞譜』も本詞を【傾杯樂】の又一體として引く。また、「淚流」を毛本・吳本は「淚滴」につくる。

(10) 李致遠【薊牡丹】(2470)に「待憑鱗羽、說與相思、水遠天長又難托」とあり、また無名氏【漢宮春】(3602)に「立馬岸、凝情久、念美人自別、鱗羽茫茫」とある。これらの例からも、柳詞と同様の印象を受ける。

(11) 「伊來」「看承」を、毛本・吳本ともに「來來」「看伊」につくる。しかし、それでは意味をなさないように思われ、

おそらくは「伊來」「看承」が正しいだろう。

(12) 嘉靖年間に洪梗が編纂した『六十家小説』所収。この小説の中で、柳永は相当卑俗な人物として描かれている。

(13) 逆のパターンとしては「李娃傳」などが挙げられるかも知れないが、やはりそれは例外の範疇であろう。

(14) たとえば、『迷仙引（繞過拜年）』は「主」である男性に一途な思いを打ち明ける妓女の姿が描かれ、『望遠行（繡幃睡起）』には、ふらふらと遊び歩く遊冶郎の男を待ちこがれる妓女の思いがつつられる。

(15) 例えば、周格非【線頭鴨】(914)に「試與問、多才誰更、匹配得文君」、黄昇【鵲橋仙】(2999)に「雲窗霧閣事茫茫、試與問、杏梁雙燕」、張炎【三姝媚】(3465)に「莫是孤村、試與問、酒家何處」とある。

(16) 詞牌名の後に、呉本は「亦名應天長」という注を付す。また、「怎忍」「漸行」を、毛本・呉本ともに「怎免」「漸疎」につくる。「漸疎」では文意にふさわしくないように思われるので、「漸行」が正しいだろう。さらに、「只恐」を毛本・呉本は「恐」につくるが、ここは四字句とすべきであろう。

(17) 詞牌名を、毛本は【雨中花慢】、呉本は【雨中花】につくり、『欽定詞譜』は【雨中花慢】の又一体として本詞を引く。また、「整頓」を毛本・呉本は「陡頓（にわか）」につくるが、それでは文意をなさないように思われる。「偷翦雲鬢」

「繡衾」は、毛本・呉本ともに「偷剪香鬢」「鴛衾」につくる。

(18) 柳永には他に、『木蘭花慢』「念對酒當歌、低幃並枕、翻恁輕孤、洞仙歌」「每祇向、洞房深處、痛憐極寵、似覺些子輕孤、早恁背人淚灑」の二首に、同様の表記がある。また、韓流【水調歌頭】(2258)に「只怕輕孤負、莫待巧安排、元・王惲『秋澗集』卷七十七【點紅唇】に「莫輕辜負。預問隣家酒」とある。「辜負」はしばしば「孤負」と書かれる。